

生薬ニュース

近畿大学東洋医学研究所附属診療所調剤室

ニンジンとは・・・

オタネニンジン : *Panax ginseng* (ウコギ科) の根のことで、野菜のニンジンと漢字は同じですが全く違うものです。『朝鮮人参』や『高麗人参』という呼び名でご存じの方も多いと思います。基本的に日本で自生しないとされているニンジンですが、実は日本でも生産されています。以前は島根、会津などの松平家配下の土地

【薬能】 大補元気、補脾益肺、生津、安神、升提

【性味】 甘、微苦、微温

今月のピックアップ

にんじん
人参

でも栽培が進められていたが、現在農協に部会を置くなどして積極的に栽培しているのは長野県のみです。

オタネニンジンとは、『御種（おんたね）』の意味で、江戸時代に徳川吉宗が種子を下げ渡してこのニンジンの栽培を奨励したことに由来するそうです。そのため、前述のように松平家配下の土地での栽培が盛んだったようです。



ニンジンの成分と薬効・・・

主な含有成分は、サポニンであるジンセノシド（ギンセノシド）やパナクシノール、セスキテルペンなどがあります。

ジンセノシドは Ro、Ra～Rh まで 25 種を超す成分が知られており、そのうちのジンセノシド Rb1 は主に陰の作用：中枢抑制作用、精神安定作用、降圧作用を、別のジンセノシド Rg1 は逆に陽の作用：中枢興奮作用、降圧作用、抗疲労作用を担っています。

この相反する作用が、ニンジン特有の陰陽バランスの効果を発揮するのかもしれない。



コウジン（紅参）

コウジン（紅参）という生薬をご存じでしょうか？これは、ニンジンを水蒸気で蒸した後乾燥させたもので、加工の際にニンジンに含まれるデンプンがカラメル化して硬くなり、淡黄褐色から赤褐色（うすい黄土色から赤茶色）を呈しています。この加工の工程で、4 種類のサポニンが消失しますが、一方で新たに 7 種類のサポニンが出現します。実際にこの影響が臨床的に及ぼす影響はまだ解明されていませんが、医師によっては処方をあえてコウジンに変更することもあるようです。もともとこの加工は長期保存する際の虫の侵入を防ぐ目的で行われていたようです。賞味期限のない生薬の世界ならではのトピックですね。

ニンジンが含まれる方剤・・・

かみきひとう
加味帰脾湯

(心身が疲れ、体力が低下しているものの、貧血、不眠症、精神不安、神経症)

にんじんようえいとう
人參養榮湯

(病後の体力低下、疲労倦怠、食欲不振、寝汗、手足の冷え、貧血)

はんげしゃしんとう
半夏瀉心湯

(急性・慢性胃腸カタル、消化不良、神経性胃炎、神経症など)

ほちゅうえっきとう
補中益気湯

(虚弱体質、疲労倦怠、病後の衰弱、食欲不振など)

ニンジンの種類・・・

ニンジンにはさまざまな種類があります。類似生薬として有名なのが、三七（さんしち）です。参三七（じんさんしち）/田三七（でんさんしち）などと呼ばれることもあります。これはニンジンとは薬能が異なり、止血作用があるので、胃潰瘍などの出血時に使用されます。唯一の日本の自生種である竹節人參（ちくせつ）はニンジンの代用として使用されることもありましたが、成分的にニンジンとは全く異なるので、別物として扱うべきでしょう。他にも、党参（とうじん）は、中国でニンジンの代わりによく処方される生薬で、ニンジンよりは効力が弱いとされ、その違いで使い分けられているようです。広東人參（かんとん）は、ニンジンと成分的には似ているのですが、ニンジンに比べて身体を暖め過ぎないということで、気温の高い広東で利用されています。これは日本で使用する習慣がないためほとんど輸入はされていません。



人參三七

西洋人參

竹節人參

国内のニンジン栽培・・・

現在日本でのニンジン栽培は主に長野県で行われています。ニンジンには1年目は葉が1枚、2年目は2枚と1年ごとに葉が少しずつ増える、とても生育の遅い植物です。5年～6年経つまで種子をつけさせずその後その根を収穫します。この点もニンジンが高価になる要因かもしれません。また、長野で栽培されているニンジンのほとんどが紅参に加工されます。下の写真（右）のように1本ずつ布に巻かれて蒸すという丁寧な仕事が行われていることもわかりますね。ここまで手をかけて育てるニンジン、何千年も前から重要な生薬として取り扱われていることにも納得です。



この5枚で1セット
このセットが1年ごとに増えていく

